

長野ふしぎ発見～お蚕様との暮らし 後期～

**【今度は絶対に死なせたくない。】**

9月。4年1組に新しいお蚕様が岡谷蚕糸博物館から来てくれました。「黄白（おうはく）」という種類のお蚕様で、メスのまゆが黄色くなる種類です。「今回のお蚕様は絶対に死なせたくない。そして全て命を止めてその命をいただこう。」そう目標を立てて2回目のお蚕様との生活を始めた子どもたち。すくすくと成長していく黄白の姿を嬉しそうに見つめていました。「運動会も終わったし、もう自分たちの箱で飼ってもいいよね。」そう言って子どもたちは大きな箱から黄白を別の箱に移し、家に持ち帰って行きました。



**【何の病気なんだろう。】**



黄白が5齢になる日。教室に行くと、お蚕様の箱の周りに子どもたちが集まって叫んでいました。「先生、大変だ！かいこが吐いている。」それは、ありあけの時にも経験した、病気にかかったお蚕様の姿でした。口から黒い液体を吐いているお蚕様、お尻から赤っぽい液体を出すお蚕様、昨日とは全く違うお蚕様の姿に、担任は呆然としてしまいました。しかし子どもたちは違いました。「何の病気なんだろう！？そうさ S ちゃんの自主学习ノートに書いてあった。持ってきて！」「すぐに分けないと！」「食べてた桑に何かあったのかも知れない。顕微鏡で見てみよう。」そこからは子どもたちが自分たちができることをそれ

ぞれに一生懸命してくれました。いつの間にか黒板はお蚕様の情報で埋まっていました。

**【桑の木の下に埋めてあげよう。】**

90頭ほどいたお蚕様は、10数頭程度になってしまいました。命が止まってしまったお蚕様はみんなで埋めに行きました。「桑の木の下に埋めてあげよう。せめて天国に行ったとき、おなかいっぱい食べられるようになるといいな。」お蚕様を埋めた後、自然と手を合わせる子どもたち。「死なせない。」あの言葉は何だったのか。自分たちは精一杯やったのか。できることはなかったのか。今も問い返しています。大幅に頭数が減り、当初の予定だった製品を作ることもできなくなってしまいました。それでも今生きている黄白を大切にしよう。そう思いながら一緒に過ごしたお蚕様がまゆをつむいでいる姿を見てとても嬉しくなりました。



**【紡いで灯すランプシェード】**



「みんなの、一カ所に集めてみようよ。」カーテンを引いて暗くした学習センター。その中でも一番光の届かない場所に子どもたちは集まってきました。その時手に持っていたのは、お蚕様のまゆから紡いだ糸を使って作った「ランプシェード」でした。「いくよ～。せ～の。」かけ声と共に、学習センターの明かりが消されました。子どもたちの輪の中心にあるランプシェードが一斉に光り出します。その瞬間、大きな歓声が上がりました。「すごいね。」「まるで街みたいだ。」点滅するLEDライト。それを優しく包み込む生糸。ただ光っているだけなのに目が離せなくなり、長い時間みんなでその光を眺めていました。

**【来年、お蚕様が無事に成長しますように】**

今、冷蔵庫にはお蚕様の卵が眠っています。小正月につくられるまゆ玉が、養蚕の盛んな頃に、「来年もお蚕様が無事に成長しますように」と願いを込めて作られていたことを知った子どもたちと、まゆ玉を作り、どんど焼きをしました。どんど焼きが終わった後、「先生、この灰をかきこのお墓にまいたらどうかな。」と提案してくてくれた子がいました。どんど焼きの灰は家の周りに撒くと良いということを調べていたので、その子にとってこの灰はただの灰ではないと考えていたのです。小正月の行事「どんど焼き」の中にお蚕様の歴史を感じ、卵を考えながら、来年の春に思いめぐらせています。

